

聖書 ヨシユア記24章14〜24節、ヨハネ福音書6章60〜71節、

ヨハネ福音書6章60節を見ると、弟子たち多くの者が「実にひどい話だ。だが、こんな話を聞いていられようか」とあります。この弟子たちの言葉が弟子たちから出た理由は、イエスが48節で「わたしは命のパンである」と言った後、51節で「このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである」と言ったことで、ユダヤ人たちが、その言葉の意味を論議し始めたので、イエスが「はっきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである」(53〜55節)と言ったからです。

イエスの肉と血を食べなければ永遠の命が得られないと断言したからです。このことよって、66節を見ると、「弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった」とあるように、イエスに従っていた弟子たちがイエスを見捨てて離れていったのです。ところが、使徒言行録4章14節によれば、「議員や他の者たちは、ペトロとヨハネの大胆な態度を見、しかも二人が無学な普通の人であることを知って驚き、また、イエスと一緒にいた者であるということも分かった」とあります。使徒言行録の記述は、イエスの十字架刑死の直前から、たった50日から60日ほどでペトロとヨハネを含めたイエスの弟子たちの様子が一変しているのです。過越祭直前、イエスがゲッセマネで神殿警備隊とローマ予備隊に逮捕されると、弟子たちは蜘蛛の子を散らすようにイエスを見捨てて逃げてしまったのとは対照的です。イエスの逮捕と十字架刑死から2カ月余りでペトロとヨハネは自ら見捨てたイエスをメシアだと公言してユダヤ当局に捕まるが、大祭司一族とサンヘドリンの議員らを前に「堂々とした態度」でイエスがメシア(キリスト)だという告白の正当性を訴えたのです。

ユダヤ当局はイエスを処刑することでイエスが主導した神の国運動が沈静化するものと考えたと思われます。イエスが展開した神の国運動というのは、この地上において神の支配が実現しているという強い確信に基づいて行われた者です。主の祈りで「御国が来ますように。御心が行われますように。∴におけるように梨状にも」(マタイ福音書6章10節)とあるように、神の意志が地上において成就することが期待されています。これは、死んだら天国で平安に暮らすという類のものではなく、その中核には、天地創造において神が確立させた創造の秩序が再び地上で機能するという期待である。この創造の秩序というのは、神が創造の御業を成した時の本来の意図がどこにあったかということが根本的に問題となっています。例えば、イエスの公の活動においては、ユダヤ社会から罪人として排除されていた病人を癒す行動によって、

人種、社会階層、性別による差別など、構造的な不平等や不条理に対して、神の支配が到来しているという視点から、人々に価値観の転換を促しています。それは、神を信じていれば、何らかの助けが天からやって来ることを待つというような消極的な姿勢ではなく、最終的な正義の実現を見据えて当事者であるイエスとイエスの弟子たちが現実の社会に積極的に働きかけていく姿勢のことなのです。

このイエスの神の国運動はエルサレム神殿で既得権益を持っていた人たちの脅威となっただけです。

ところが、ユダヤ当局者だけでなく、これまでイエスと一緒に行動をして来て、イエスの話もたくさん聞いてきた弟子たちの間で、イエスに対する拒否反応が出て来たのです。イエスが61節以下で「あなたがたはこのことにつまづくのか。それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。命を与えるのは霊である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる」と語っていて、イエスが神の意志の実現のためには、自らの命を与えるという意味でお話になったことを言っているのです。イエスがご自分の肉を食べ、その血を飲まなければ、永遠の命を得ることはできないと言うのは、神の意志の実現のために、イエスの弟子たちも自らの命を差し出す覚悟がなければ、神の意志がこの地上に実現することにはならないということとを言っていたのです。

68節で、シモン・ペトロが「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」と信仰告白をしています。まだ、シモン・ペトロはイエスが神の意志がイエスにおいて実現することを知っていません。神の意志が十字架上でイエスが殺されることによって実現したことに気づくまでには至っていないのです。

ガリラヤで神の国運動を開始されたイエスは、エルサレム神殿での祭儀を通して民衆を搾取する神殿貴族の在り方に批判的だったのです。それは、神殿を盗賊の巣にしてしまった、という痛烈な批判の言葉に象徴的に表されています。イエスによる神殿での宮清めは、本来民衆が神を礼拝してそこに救済を見い出す場であるはずであった。ところが、神殿貴族たちは民衆を搾取し蹂躪する社会構造の中心部に変えてしまったのです。ここで注意したいことは、イエスがエルサレム神殿の存在自体を否定したのではなく、神殿を利用して富を自らの集中させる神殿貴族による統治体制だったのです。だから、祭司長ら神殿貴族たちはイエスを捕えて殺そうとしたのです。ですから、イエスはエルサレム神殿において神の臨在を畏れつつ礼拝できる場所と考えていたのです。そのことは、イエスの弟子たちにも受け継がれ、弟子たちがエルサレムで初代教会の活動を始めたことでも、そのことは確認できるのです。